



一つ一つの花から



理事 中山 斉

さいふく 罪福信ずる行者は ぶっち 仏智不思議をうたがひて
ぎじょうたいくう 疑城胎宮にとどまれば さんぼう 三宝にはなれたてまつる

実をいうと私の本職は住職ということで、今回は本業のおいがるコラムとなったことをご容赦願います。

さて、上記の「罪福信ずる…」は親鸞聖人の和讃というのですが、大意は「阿弥陀の本願を信じきれないで一般的な善悪の因果を信じているものは、浄土に往生できても胎宮という浄土の蓮の蕾のなかにずっととどまって、仏の教えを聞くことができない（のでいつまでも悟りをひらけない）」となります。

政府はようやく5月8日に新型コロナウイルス感染症を指定感染症の第5類に下げると表明し、わたしたちも新年度を少し心穏やかに迎えることができ、何よりですが、この3年間のマスクで口と鼻を隠し、行動範囲や人との接触を制限し、同居家族も含めてコロナでなくても解熱後相応の時間が経つまで家庭保育をお願いするという息の詰まる生活は、多くの人をここで言う胎宮に閉じ込めていたと言えるかもしれません。

確かにコロナによる直接死はそれなりに抑えられたかもしれませんが、超過死亡数（平年の死者数を基にした予想死亡数を越えた人数）は、公で言われている理由では説明がつかない増え方で、感染症から命を守ろうとしてそれ以外でより多くの人々が亡くなってしまっている、という皮肉なことになっています。

胎宮は、浄土の蓮の蕾の中でしかも宮とあるようにとても心地よいところなのですが、浄土を見ることもできず閉じ込められていることを表しています。別の和讃では牢獄とも表現しています。コロナ禍で安全なところに閉じこもり、できるだけ心地よい環境を作ったとしてもそれは牢獄と変わらないのではないかと。これから先、第9波や新たな感染症が発生した時、私たちはまたその中に閉じこもるのでしょうか。ソクラテスは「何よりも大切にすべきことは、ただ生きることではなく、よく生きることである」といっています。パンデミック下での「よく生きること」について、3年間の反省を踏まえて考えていく必要があります。

一一のはなのなかよりは 三十六百千億の
光明照らしてほがらかに いたらぬところはさらになし

これも和讃です。浄土には百千億（たぶん千億の百倍）の蓮の花びらがあってその花びら一枚一枚が36の光を放っており、まばゆいばかりの光が空に雲一つなく晴れ渡っている時のようにさえぎるもなく隅々まで届いている、そんな意味です。花びらから36色の光というのは、浄土の蓮の花びらは6枚で、一つ一つの花びらはそれぞれに赤や黄、青や白などの光を放ち、しかもそれらが反射しあい一つの花から $6 \times 6 = 36$ の光を放っているということで、まるで万華鏡の中にいるかのようなきらびやかな世界として浄土が表現されています。この浄土から放たれている光は、「いたらぬところはさらになし」なので、わたしたちのこの娑婆世界をも照らしているはずなのですが、悲しいかな、知らず知らずのうちに私たちの心の目が曇ってしまっていて普段は気づかずに過ごしています。

でも、無邪気に無心に遊んでいるときの子どもの笑顔と笑顔は、浄土の蓮の花びらのように輝きを放ちあっている、そんな瞬間を保育者なら一度となく経験しているのではないのでしょうか。そんな一瞬を切り取った写真が撮れたら保育フォト展で間違いなく1等になれますね。

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症の指定感染症第5類への引き下げ、異次元の少子化対策、子ども家庭庁の発足という節目になります。東京都民間保育園協会の各保育園から三十六百千億の光が放たれていることを想像して新年度を迎えたいと思います。